中勘助全集

第九卷

小宮豐隆
和辻哲郎 編集

中勘助全集

第九卷

角川書店

中勘助全集
第九卷

昭和三十六年十二月二十五日　初版發行
昭和四十一年三月　十日　四版發行

定價　一五〇〇圓

著作者　中勘助
發行者　角川源義
印刷者　中内あき子
製本者　鈴木俊一
發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座　東京　一九五二〇八番
電話東京（265）七一一一（大代表）

© K. Naka 1961　Printed in Japan
落丁・亂丁本はお取替へ致します

目次

羽鳥　三
羽鳥　五
忘れ庵　二二
羽鳥　二六
忘れ庵　三〇
羽鳥　四三
あとがき　四九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

羽

鳥

羽　鳥

昭和二十年四月二十六日

あ　あーつと私は悲鳴に似た叫び聲をあげた。けふも幾たびとなく筆をとらうとしながらどうしてもとりつけず机の用意はそのままに座蒲團を並べて籠枕に仰臥してたのを、愈〻ひと思ひに起上つてインキ壺の栓をとる拍子にひつくりかへしてしまつたのだ。いつぱいはひつてたインキが小さな机にどつぷりと流れ出した。私は手早く壺をかたよせた。幸ひインキは不規則な圓形に溜つてゐる。隣室で蒲團の綿を入れてた和子が吸取紙とアルマイトの盆と丼の蓋をもつて駈けつけた。今どきかけがへのない、私の仕事にはなくてならぬインキを出來るだけ助けるため私は指先をインキに浸して机に一筋の路をつくつた。さうして机を傾けたら計畫はみごと黄河の治水よりも先に成功した。丼の蓋の純白の瀬戸物の肌に目のさめるやうな青。「綺麗ぢやないか」さういつて思はず見とれる。ちやうど繪具皿に繪具をといた形だ。和子も讃嘆する。それにこれはいとも貴い平和の色である。戰爭が酣になつてからかういふ濃厚なインキの色を見たことがない。これは羽鳥へ移るまへ和子が新間の奥へマッチを買ひにいつたときに見つけたか聞きつけたかし

てわけてもらつてきたものだ。新間の奥なればこそいつからかの賣れ殘り、それも　僅になつたので家で使はうと思つてるのだけれど　といつて雜貨屋の娘さんが分けてくれた本物のインキだ。和子は萬年筆用のスポイトで手際よくもとの壺に戻す。私は丼の蓋を勝手口で洗ひながらまた綿入れにかかつた和子に「陶器のありがた味がこんなときによくわかる。素燒しかなかつた時代はどんなだつたらう」といへば和子も無條件に同意する。戰爭のため物資の缺乏がひどくなるにつれ從來粗末にしてた物の貴さをしみじみと知らされる。これはすくなくとも私にとつては地味ではあるが最もコクのある喜びであり幸福である、なにも窮乏を樂しむのではないけれども。

洗ひをはつて私は勝手口からあがりながら「これでやつと執筆のきつかけができたぞ」といつた。先月の十日から引越しの準備、家捜し、引越し、後始末、身心の疲勞、等、等で何といふことなく一月半ほど過してしまつた。よほど前から靜岡の爆擊が激しくなるにつれ、また家財の疎開命令も出たとかで川ぞひの縣道は朝から晩まで車の行列が續いた。川上何里とかまで農家はさういふ荷物で一杯になるし、他の地方からの疎開者や避難者がゐたり豫約があつたりであき間なぞありはしない。いよいよせつぱつまつたとき石上さんは「羽鳥に最初おいでなさいといつたのは自分だ。おいでなさいといふ限りはどこまでも世話をするつもりなのだから今更野宿させるやうなことはしない。安心なさい」といふことで最後の切札としてあつたところを譲つてくだすつた。それはこの家で、夫君の出征中預つてある豐子さん親子のためにもと炭小屋とかだつたところに手を入れて住居にしたものである。ところがそれとほとんど同時に隣り字の谷津の□□さん

から　近所の離れを懇談の結果貸してもらへることになつた　といふぢきぢきのお知らせで、ちやうど自分のとこの筋向うで萬事好都合だし自分も安心だから　といふことだつた。□□さんとはほとんど何の緣故もないのだけれど苦しい時の人賴みで靜岡から野菜を買ひにきた××さんをとほしてお願ひしたのだつたが、□□さんの家も疎開の荷物で一杯ゆゑ忙しい中で骨を折つて下すつたのだ。といつて羽鳥と兩方といふ譯にはゆかず、よく事情を話して心苦しくお斷りしたところ快く承知してくだすつた。あとで私たちは「あんまり運がよすぎた」と嘆息するやうにいひあつた。まことに有り難いことであつた。

話がとぶが、けさ母屋の奥さんがあらめを一束もつてきてくだすつたときにその事から筆を下さうかと思つたができず、午後緣先で髮を洗ひいい氣もちになにか口ずさみながら部屋へ上らうとしたときに史子さんが酒の粕をもつてきてくれたのでそれから著手しようとしたがそれもできなかつた。とつおいつしてるところへ和子がそれを少し燒いて醬油をかけ高山植物を模樣にした角型の小皿にのせてきた。酒の氣が强くてうまかつた。——ここまで書いたとき夕食ができた。で、机の上のものをおろして卽席の食卓にする。そこへ國民登錄の用紙が組長さんから屆けられた。それに一わたり目をとほしてまた食事にかかる。ところへ史子さんが煮魚を二きれ小皿にもつてきてくれた。早速賞味する。お砂糖がないから　との口上だつたけれどとても結構な加減で骨までたべられる。川魚らしいが干したもののやうでもある。かう朝、晝、晩とおさいを貫つては登錄に「寄食者」とせねばなるまい　と笑ふ。最初は「お引越し忽忽で買物にお出になる暇も

おありにならないでせうから」と幾日か度たびお菜を届けてくだすつたのがそれなりけふまでも續いて毎日きつと何か戴き物をする。食べ物ばかりか何から何まで行届いたお世話に恐縮も感謝もしながら私たちは顔を見合せて「こりやどうしたらいいだらう。あまり有り難くて果報負けがしはしないか」なぞといひあひ喜びあふのだつた。先刻もここへきてから戴いたものを和子と思ひ出してみた。時節柄少しづつではあるけれども蠣、あさり、鰯の醤油漬、煮豆、香煎、南京豆、パン、梅干、切ぼし、わけぎのぬた、團子、ごま鹽、おはぎ、味噌、いと菜、サラダ菜、大根、さと芋の煮付、わけぎ、わらび、竹の子、葡萄酒、わかめ、こんぶ、昆布の佃煮、こんにやく。史子さんの靜岡みやげには生葡萄酒、うに。きのふは味噌汁用のみそとしやれた鼻緒、鼻緒をつくる道具。そればかりか時をり綺麗な花までもらふ。これらの食料はこの深刻な物資缺乏の際直接命につながるものである。

話が戻る。燒粕で茶をのんでから私は日にあたるために堤のはうへ散歩することにした。「綿入羽織ぢや暑いだらう」といへば和子は「あのセルの羽織が用意してある」といつて簞笥から出してきせながら「洗つたらこんなに見ちがへるやうに綺麗になつた」といふ。どれほど綺麗になつたかは知らないが洗つただけのことはあるだらう。山田の形見だ。岩波と山田の骨をもつて大阪へいつてからもう三十年になる。これを著せる人がかはるたんびに私はさういふ友人の形見だといふことを話してきかせるのだ。物がいいせゐもあらうがよくもつた。今では毛がすつかりとれてセルらしいところはなく、和子は「お召しみたいにみえる」といふ。セルがおめしとはたい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

した變りばえだ。

追記。この羽織にはもうすこし後に作つた詩がある。

どうにかこの秋をしのがうと
妻がぬひなほすセルの羽織
著古しては裏返し
そめかへしては仕立てなほす
上方ごのみの縞柄
時世おくれのしろもの
三十數年前の友のかたみ
異常の才能に惠まれ
善良の化身と生れ
友情に篤く
信義に固く
傷つきやすく歪みやすく
暗黑の淵にのぞんだ私を
師のごとくに導き

保姆のごとくにみとり
まごころこめて奉仕して
をしくも病ひに殪れた
思へばまたない友だつた
おい山田
若い時には世話になつたな
戰災で家がやけて
こんなとこに漂浪してるよ
姉も死んだ
年もとつた
だが六十の坂をこしても
まだ著てるぞかたみの羽織

昭和二二、九、二七

かなり強い東風に辟易してぢきに散歩から歸つたら和子は私のために茶の用意をして焜爐で湯を沸してゐた。私はそのまま机に向つたけれどとりつけないので籠枕をして寢ころんだ。さうしてインキ壺轉倒の件になつたのである。

二十七日

きのふの魚はふぢはなといつて藤の花のさくころ藁科川でとれるのださうだ。さういへばきのふ堤を歩いたとき四、五人川原で釣つてゐた。川魚としては上の部ではない。煮かたは七匹の魚に水一升でことこと煮つめる。骨まで軟かになつて甘露煮みたいになる　と母屋の奥さんの傳授。

引越しを手傳つてくれた村の人たちがよくこんなにはひつたと驚いたくらゐ樟ケ谷の六疊ぎりぎりの一間に荷物が詰つてゐた。初手からさうではなかつたのだが住んでるうちに不自由を感じてあれを買ひこれを取寄せ、その置きかた積みかたなどその場にゐて朝となく晩となく工夫するから後から取出してみれば意外なかさの物がどうにか納まつてたのだ。そのかはり六疊はいつか五疊となり、四疊となり、その狹められた空間が書齋となり、居間となり、茶の間となり、客間となり、裁縫室となり、病室となり、炊事場ともなる有樣で、そこへ和子の妹がきて時には一週間も泊つていつた。工夫はまさに神通力の域にまで達したのである。さて引越しの荷拵へとなつたが、東京から送つたときの空箱は置場所に困る分はたきつけにしてしまつたし、新規に手に入れる方法もないので、幸ひ石上さんから蜜柑を三十貫屆けてくれた箱――蜜柑どこゆゑ蜜柑は豐富にある。――がその儘になつてたのを借りることにし、そのほかあれこれと無理に融通をし、それでも餘る物はばらで運ぶことにして直しておいた古釘で打附け、ほどいて繋ぎ合せた古紐をかけなど物の不足と場所の狹さのためさんざ苦勞したあげくどうにか恰好がついた。そのあひだ

に私は和子を谷津の□□さんへやつて大行李を一つ預つてもらふ承諾を得た。羽鳥はとにかく縣道にそつた家並の所である。で、萬一を慮つて四季を通じての私どもの衣類一揃ひと東京の親類から賴まれた高級の衣類をつめたものだ。そこで自分でせんだん爺さんのところへいつて賴んだらすぐ引受けてくれた。私は荷が勝ちはしないかと懸念したが婆さんは「私でもええかげん背負ひやす」といつて問題にしなかつた。約束の日に婆さんが背負ひ梯子をもつて早朝きてくれた。天氣は大丈夫。行李を背負つた婆さんを先に谷津へゆく、寒いので外套の襟を立てソフトを目深にして。道みち婆さんは自分のやうに不仕合せな者はない。十四で嫁にきて何年とかしたらつれあひが三十で死んだ。……それからずつと一人でゐたが十年とか前に先のつれあひの弟になる今の爺さんがかみさんを亡くしたのでいつしよになつた。……などと身の上話をこまごまとする。婆さんは私より少し年上らしい。爺さんは　ときけばよく知らないが何どしだとかいふ。七十いくつらしい。小作をしてるのだ。

□□さんへいつて荷物を預けるあひだ話はとぎれたが歸りにはまためんめんとつづく。どことやらで馬が人間の姿をした子をうんだ。——婆さんは大まじめだ。——それが口をきいていふにはこの戰は必ず勝つ。だによつて强飯をたいてあげるがいい。——なんでもこんな話だつた。——さういつて間もなく死んだ。で、葬らうと思つて棺に入れて擔いでいつたら途中で輕くなつてしまつた。怪しんであけてみたらもぬけの殼だつた。さういつて婆さんは「馬頭觀音さんででもあるんぢやないかと思つてわしもおこはをたいてあげやした」といつた。

引越しの前日私は障子の切貼りをした。日當り風當りの強いせゐもあるがそのほかにもう一つ實に思ひがけないことのためにぽつぽつと障子に孔があく。それは天氣のいい日いつぱいに日光をうけたこの肱掛け窓の障子に本能的にひきつけられるのであらう、馬蠅が非常な勢で飛んできてぶつかる。ところが紙が弱つてるためにその上半身がつきぬけて内に、下半身が外に殘つて文字どほり進退谷まつて蹠いてゐる。そのたんびに私は大きな眼玉のついた頭を押して出してやる。と、彼らは何事もなかつたやうに威勢よく宙を飛んで姿を消してしまふが、迷惑千萬にもそのあとに豆鐵砲を打込んだぐらゐの孔が障子にあく。そして風がだんだんそれを吹きひろげるのだ。たつ鳥あとを濁さぬやう切貼りをして立退いたあとの掃除はせんだん婆さんに賴む。

荷物の運搬について谷津の□□さんは　時節柄人手もなからうから幸ひ自分のところは手もあり倅もゐるから車をもつてつて運んであげませう　と親切にいはれたけれど　この忙しい時に入隊を目のまへに控へた息子さんにまで迷惑をかけては　と思つてそれは辭退した。そしてせんだん夫婦に運んでもらふことに手筈をきめ、その車を借りる相談に××さんへいつたところ　當日組の者がリヤカーで運ぶといつてた　といふことなので私は前と同じ理由で辭退したが　遠慮には及ばぬ是非　といふ話だし、組長さんへ挨拶にいつたら　引越しのときは皆が手傳ふのは村のしきたりだから　といはれたので有り難く御好意を戴くことにした。そんな風で人手も車もあり餘るほどになり、引越しは譯なくすんだ、ひと樣のお蔭で。

新しい住居にはまだ手を入れなければならぬところもあり、疊建具も揃つてゐなかつたのを母

屋のお世話で靜岡からブリキ屋さんと左官屋さんがき、疊も障子も母屋のを融通していただいて間に合つた。障子紙は私のはうに買ひおきがあつたがなほ節約のため下から三段ばかりを謠本のほごしたので貼ることにする。昔むかし父が書き入れをしたものであまり古すぎて古本屋も買はない。が、戰爭で物の價値が轉倒して本居宣長全集が古本ではひどい値なのに紙屑にすればずつと高く賣れるときいた。この謠本の紙屑も相當なものかもしれない。糊は奥さんが生麩をたつぷりくだすつた。障子はりは私が引受ける。手當り次第にはつていつたら偶然上段が野宮で次つぎ仲光、白樂天となつた。目にふれるところを口にまかせて小聲に謠つてみたりしながら貼つてゆく。

そんな風にして私どもの新宅はどうにか恰好がついた。面目一新。くる人もくる人もいい住居になつたとほめてゆく。炭小屋から人間の住みかへ！　ここは六疊に長四疊、押入れがつき、狹いながら入口に土間もある。緣もあり、手洗ひもある。臺所もあり、流しもあつてはるか母屋のはうから鐵管で水がくる。洗濯のための流しも外につけてくだすつた。その六疊のはうに書棚を二つ並べて書齋兼居間、客間、食堂とし、長四疊には蠅帳、衣類の箱、茶簞笥代りのあき箱、食器棚代りのあき箱、簞笥、用簞笥等ところ狹しと積重ね、一人分の床をのべる餘地を殘して萬一の時の病室にあてた。

ある朝早くせんだん爺さんが賴んでおいた篠竹を一束もつて入口から訪れた。野良著姿しか見たことがないのを珍しく和服だ。挨拶のつもりもあつたのかもしれない。上りはなに腰をかけて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb